

## 思い出

栗山佳子

「パリ旅行に行つて来たわ。凱旋門の下を歩くと、赤、グリーンのオーバーで歩く姿が街の風景に溶け込んで、自然を感じるの」

いつも明るい洋子からの電話は弾んでいる。確かに日本人は黒、茶色、紺色が主流の服装が多い。私は二十代、三十代に着ていた服を思い切って捨てた。洋子の弾む声が続く。

「パリの美術館にも行ってきたわ。ダ・ヴィンチの絵があり、ナポレオンの絵のまえでは思わず立ち止まったわ。ゴッホの『ヒマワリ』など、とても感動したわ」

「私も行きたいところは、やはりパリだわ。今のコロナウイルス恐怖が終わったなら一緒に行きたいわね」

六十年前の高校生時代、洋子は男子生徒から憧れの女子高生だったので、羨ましく思っていた自分を思い出した。大きな目は輝いて涙がこぼれそうな目を伏し目がちにする彼女だった。いつも笑顔を絶やさなく大きめの口は唇厚く親しみを人に与えてくれた。ふっくらとした胸は大人びているが、首を傾げた顔は童顔で周りを明るくしていた。

八十九歳の姉、宣子に電話する。二日に一度は電話を掛ける。姉は、

「このシルバーハウスは天国だわ。コロナウイルス恐怖もないし、至れり尽くせりで世話をしてくれるよ」

「本当に札幌で一番良い場所だわ。藻岩山も一望出来るし、西日が特に綺麗だわ」

「朝ご飯はいつもの四人でおしゃべりをしながら、運ばれてくるご馳走を綺麗に食べ終わると、食堂のかかりつけの人達が片付けてくれるし、マスクをしているからコロナウイルス恐怖は全くないの。この建物の入り口で厳重な検査を終えているから、菌は入って来ないわ。食事の時間が終わると、ヘルパーさんが車いすのまま十一階の部屋まで送り届けてくれるし、風呂の時間になると、髪を洗ってくれ、背中をシャンプーなどして気持が良いわ」

「至れり尽くせりだわね。買い物はどうするの？」

「男の人が車椅子を押して、近所のスーパーやコンビニエンスストアに連れていってくれるの。そこでお金を下ろしたり、入金したり、とても親切にしてくれるの」

「今度コロナ自粛が終わったら、私が連れて行くわ。もう少しの我慢だわ。年が明けてオンラインピックが終わったら、会いたいわね」

一人住まいで生きている私は姉、宣子の生き方は羽根をもぎ取られた鳥を思わせて、哀

れに感じるが、口には出さなかった。ふとため息をもらしながら受話器を置いた。姉には世話になった。電話だけの御礼はとても寂しい限りだがこれ以上なすすべを持たない。

父が娘六人を置いて死亡した後は、母が発疹チブスで隔離病棟に入れられ、上の姉妹が下の姉妹を食べさせ、学校にも入れてくれた。女学校を卒業すると、小学校教員の資格を取って下の姉妹を高校まで行かせてくれた。独身を通しながら好きな恋人とも別れ、家族を護ってくれた。そのおかげで平穩な自分が生きてこられた。

九十七歳の修子は夫婦で入居している施設でお世話になっている。思う存分食べる能力がある。紙おむつ姿で床にはいるが、耳は聞こえなくとも紙に書かれた文字を読んで会話が出来る。車椅子生活だが、顔は若々しい。スケート競技に打ち込んできた体は鍛え抜かれている。オリンピック候補として日本選手権を二度にわたり乗り越えて来た過去がある。オリンピック出場は出来なかったが、世界中のオリンピック場（アテネ五輪、ソウル五輪）など橋本聖子選手の応援者として走り回って来た経歴があった。太腿にはまだ筋肉が残り、顔の頬は艶やかで生命力に満ちている。十二歳年下の私より艶やかな頬が不思議だった。八十六歳、恒子はヘルスハウス、で毎日歌を唄っている。オペラ調で歌うソプラノは高校生時代、マイクなしで講堂の後ろ壁に届く高い声は今でも忘れない。ヘルスハウスは徳川家康の子孫が社長を務める全国に渡る施設である。

九十六歳の房子さんは隣に住む元気な人で、私の目標でもある。毎日、正確にゴミを出す。庭の手入れは草が生えていないどころか、添え木がしっかりしている。私は彼女のゴミを参考にして自宅のゴミを集める。目標として生きている。

典子さんは息子さんが開業医。医院の受付を手伝っている。孫さんは東大入学した。夕方、自宅に戻ると、私が電話して思い出と共に現況を語る。コロナウイルス恐怖の中で、一人住まいの不安定な生活環境を語り合う。懐かしい高校生時代の話に花が咲く。

「色白の肌に大きな黒い目が可愛かったわね」

「貴女こそ大きな目を輝かせて、遅刻しても元氣よく教室に入って来たわ」  
汽車通学をしていた私は時々汽車に乗り遅れた。十時ごろ学校に着くと、音楽室でピアノを弾き始める。ふと振り返ると、担任の先生が聞いていた。

「上手いね」

と言われて、ぬけぬけと「エリーゼの為に」などを弾き通した。授業の途中で教師が後ろ向きになった時に、みんなの協力で忍び込んだ時もある。

靖子とは六十年の長い付き合いがある。彼女は六十年前と変わりがない。いつも可愛い。スタイルも変わっていない。近くに住んでいるので夕方まで話し込むと、弁護士の方が急に帰ってくる。

「済みません、長居して」

「ああ、名前は知ってます」

逃げるように帰って来た。靖子は二十代の時と余り変わらない。スタイルも顔の表情も同じで何時会ってもおっとりした少女の気配を残している。夫婦同じ歳だが、弁護士の夫は世の難関辛苦を乗り越えて生きていただけあって、すさまじさが身に付いている。靖子はゆったりと暮らしているせいか、動きも表情も少女じみている。話し方も二十代と変わらない。私は近所を散歩した後は靖子に会って、白樺並木を眺めながら北の公園を歩いて帰るのが日課となっている。コロナウイルス恐怖に負けないぞ！

雪子はピアノ演奏友達で、教師をしながら二人の娘を育て上げて来た。一人はヴァイオリン奏者。一人は歯科医院を開いている。業務を手伝いながら働いている。其の為かいつも若々しい感覚を感じる。働き通すのが若さの秘訣かも知れない。私が書くエッセイを押し上げてくれる。褒めたりゆすったり、不満を語ったり、忙しいらしい。